



じい様が行く 1

『いのちだいじに』異世界ゆるり旅

Q L P H M L I G H T

萤石
Hotarishī



アルファライト文庫

主な登場人物

アディエ

オスの街の
商業ギルドマスター。
商売上手な才媛。

カルフエ

オスの街の
商業ギルド職員。
専門分野では
中々の優秀さを
見せる。

イスリール

セイタロウを異世界に
転生させた神様。
人はいいが
うつかり気味。

ルーチエ

五歳くらいに見える
女の子。
ある事情から
セイタロウに
預けられることになる。

ゴルド

オスの街の
冒險者ギルドマスター。
体格の割にかなりの
小心者。

ジルク

オスの街の
警備隊隊長。
割と肝が据わっている。

セイタロウ

日本で茶園を
経営していた様。
年の功と神様から
貰った超スキルを引ひきさげ、
異世界で旅に出る。

『1 呼ばれたじい様』

「少年よ。この世界で勇者になつてくれまいか?」

目の前の青年が妙なポーズを決めながら言った。

こちらを指差しながらも顔は天井に向いている為、
良く見ずともここにいるのは老人ただ一人。

少年なんておらん。

「お主は誰じや?」

「へ?」

僕の問いに気の抜けた声が返つてくる。

ここでやつと青年はこちらを視認しあつた。

「そしてここはどこじや?」

「えと……ボクの、部屋です」

今度の問いかけには答えてもらえたわい。

今いるのは真っ白い部屋。何にもないだだつ広い部屋。

そこで青年と二人、向かい合つておる。

「あれ？ お爺さんは誰ですか？ アサオタクミ君を呼んだはずなんですが」

「タクミは孫じゃが、お主は誰なんじゃ？」

困惑顔の青年に再度問いかける。

ここで何なぜ故孫の名前が出てくるのかも疑問だが、自分の知らない交友関係があつても不思議ではなかろう。

疑問は一つずつ解決していけば良い。

「ボクはイスリールって名前の神です」

「その神様が孫に何用じや？」

「そちらの世界で不慮の死を迎えたタクミ君をこちらの世界へ転生させようかと」

「タクミは死んどらんぞ」

孫を勝手に死んだことにするな。まったく失礼な。

夜中に物音がしたから目が覚めてしまい、見に行つたらタクミの部屋に見知らぬ男が入ろうとしつたんじや。

そこで「誰じや！」と言つたらこちらに刃物を見せおつたわ。

タクミの「じいちゃん？」って声が聞こえ、男が部屋に入ろうとしたから、思わず飛び掛かつたんじや。可愛い孫に何かあつたらと思つたら身体が勝手に動いていたわい。揉み

合いで刺されたのか、腹に激痛が走つてな。

そこで記憶は途切れどる。

「あれ？ 強盗に刺されて亡くなつちやう流れだつたのに」

「強盗に刺されたのは儂じやろう。この老いぼれがタクミの身代わりになつたんじやで。爺より先に孫が逝くなんてあつちやならんから良かつたわい」

死んだこと自体は残念だが孫を救えたなら本望じや。

「え？ つてことはボク、間違えてお爺さんをこつちに呼んじやつたの？」

「そうなんじやろうな。儂がここにおるんじやから」

「一度呼んじやつた魂は戻せないのでどうしよう……」

悩み出すイスリール。

戻れないのか。

孫の無事な顔が見られないのは残念じやが仕方ない。

「のうイスリールさんや。儂が転生すれば問題は丸く収まるのかのう？」

「全てが丸くとまではいかないですけど、ある程度は」

「ならば転生しちゃるわい」

「いいんですか？」

「転生しないでこのままここにいるわけにもいかんじやろ」

「いやまあ確かに。うやむやにしてここにずっといさせてるのも悪いですし」

それは単なる問題の先送りじゃろう。そんなの日本で嫌つてほど見とるわい。

「転生となると赤ん坊になるのか？あと記憶はどうなるんじや？」

「お爺さんの記憶を残して赤ん坊から始めるよりは、ある程度大人のほうがいいんじやないでしようか」

記憶は残せるようじやな。

「なら今よりも少し若くしてくれんかい。爺の精神した青年じゃおかしいじやろうからな」

「分かりました、そろしましよう」

目の前に2メートルくらいの光の円柱が現れる。

「肉体を再構築します。希望があればなんでも聞きますよ。こちらの全面的な非ですから」

空中に画面みたいなものを出して何かを入力するイスリール。

「言葉で苦労はしたくないのう」

「全言語習得させます。あと一般常識的な知識も入れとります。補助的な意味で鑑定能力も付けときましょう。なんでも簡単に調べることができますよ」

「すぐ死ぬのも嫌じや」

「ステータスを天災級モンスター並みにします」

「痛いのは嫌じや」

「肉体、精神の攻撃耐性、異常耐性を付けます」

「魔法があるなら使いたいのう」

「全魔法系スキルを付けます」

「攻撃より回復やら補助がいいのう」

「ならばボクの加護も付けます。ボクは攻撃が苦手なのでそちら方面に強いんですよ。一応攻撃も全属性の初級ならできますし。生活魔法も便利だから付けときます」

「あとはたくさん物を仕舞えるアイテムボックスみたいなものがあると嬉しいんじやが」

「アイテムボックスは時空間魔法で似たことができますよ。そちらの【無限収納】のほうが使い勝手いいです」

ここまで一気に思いつくまま言ってみたんじやが、全て通つてしまつたわい。
かなりのチートに仕上がつてると思うんじやがな。

「ところでお爺さん、妙に詳しくないですか？」
「タクミと一緒にオンラインゲームやつとつたからの。堅苦しい小説にも飽きてライトノベルも読んでたから、それでじやな」

純文学、ミステリ、時代、大河。どれも面白いんじやが飽きてしまつての。

タクミに借りて読んでたのがこんなことに役立つとは思わんかったわい。

「ああ、それでですか。あと何がありますか？ これだけは欲しいモノとか

「あっちの世界にお茶はあるかう？」 それだけが心配じや

「お茶はありますか日本のモノのほうが断然美味しいですね。じゃあ特殊スキルで

朝尾

茶園

付けましょう。これで好きな時に買えますよ」

「朝尾茶園って儂んとこの店じやが」

「はい。お爺さんのトコに繋げて買い物できるようになります」

自分ちのお茶が飲めるとは嬉しいことじや。

「あといろいろ困るでしようから【無限収納】に当面のお金と便利そなアイテム入れと

きますね」

「ありがたいのう」

至れり尽くせりじやな。

「他に聞きたいことありませんか？ 精神と肉体の癒着に時間かかりますから、しばらくお会いできなくなりますよ」

「しばらく？」

「はい。神殿で祈つてもらえばお会いできますから」

軽い神様じやのう。そんな簡単に会つていいものなのかな？

日本に限らず地球じやひと騒ぎになる案件じやぞ。

「最初に言つてた勇者云々はどうなのじや？」

「それは大丈夫です。他にも勇者候補はまだいますから。ただ、もし上手くいかなかつたらお手伝いだけはお願ひするかもですけど」

「手伝いくらいなら構わんぞい。ここまで我が僕聞いてもらつたんじやからな」

勇者になるのがこんな爺じやいかんじやろう。

ならなくていいならのんびり暮らそう。

「最後にお爺さんの名前を教えてください。ここまで聞くのを忘れてました」

「晴太郎、朝尾晴太郎じや」

「セイタロウさん。ではボクの世界フィロソフでまたお会いしましょう」

イスリールの笑顔を最後に、儂の意識は闇に落ちていった。

「地面にそのまま横になるのは久しぶりじやな」

『森で生きている』

目が覚めるとそこは土の上じやつた。

……地面に直じかで寝ていたようじや。

とりあえず毛布に包まつてはいたが。

「地面にそのまま横になるのは久しぶりじやな」

茶畠での作業の合間に横になることはあっても、そこはゴザなどを敷いた上でのこと。公園などの芝生に寝転ぶのはタクミが小さい時にはあったが、地面そのままとなると若い頃のヤンチャ以来になるか。

よくよく周りを見渡してみると、ここは洞穴のようで入り口からは光が差し込んでおった。

「とりあえず外に出てみるかのう」

スッと立ち上がり、そのまま外へと向かうが、特に痛みも出ないので、寝ていたのもそう長くはなかったのかもしれんな。

外へ出る時、何かの膜を抜けたような感覚に襲われた。

「何じゃ？ 何かあつたのか？」

また中に戻ると、再び同じような感覚がある。

「よく分からんからひとまず放置じや」

もう一度外へ出て周りを見渡せば、そこは木々が生い茂る森じやつた。

月が二つ見えたので夜なんじやろな。

「月が二つとはこれまた面白いのう。やはり異世界というヤツなんじやな」

二つの月に驚きはするが、違和感はない。

その辺りが知識が刷り込まれている証拠なのかもしれんな。

洞穴を振り返つてみると、そこは小さな祠のようじやつた。

「あの神様を祀る祠なんじやろうな」

いきなり儂を街へ出現させるわけにもいかん。しかし平原や広野、森の中にそのまま寝かせるわけにもいかん。

苦肉の策で、自分の祠に寝かせておく。そんなとこじやろ。

「ならあの膜は魔法なんじやろな。バリアとか結界とかその辺りかの」

顎に手を当て、少し考えていると……

グルルルルルツ。

何かの唸り声が聞こえると同時に、背後の木がメキメキ音を立てて倒れていく。

「何じや？ いきなり魔物か？」準備くらいさせてくれんかのう

愚痴つたところで状況が変わるわけもなく、木が倒れた場所には赤毛の熊がいた。

「レッドベアが最初の敵とは、なんともまあおかしな話じやわい」

イヌリールにもらった知識によると、レッドベアは初心者殺しとも言われる獰猛な熊。

魔物の危険度ランクCに分類されており、中位ランク冒險者までは複数人で狩るのが前提な魔物だそうじや。

「見逃してくれるわけもあるまいて、なんとか倒してみるかのう」
 こちらを獲物として認識している以上、逃げの一手では難しい。
 確認もなしのぶつけ本番だが、やるしかないじやろう。

【束縛】
 【バインド】

レッドベアの手足に無数の葛が絡まる。

それでもなんとか抜けようともがき、こちらへ向かおうとする。

【氷針】
 【アイスホール】

小手調べの初級魔法を唱え、放つてみる。森の中でいきなり火はいかんじやろう。
 長さ30センチほどのつららが十数本レッドベアに飛んでいく。全弾命中するとレッドベアは苦しそうに悶えながら倒れる。

上半身につららが刺さったまま動かないレッドベア。

「ぬ？ 終わりか？」

そつと近付き確認すると、息絶えていた。

レッドベアの死体を【無限収納】に回収して周囲を見回す。

特にこちらに向かってくる気配はなし。

「祠の中でとりあえず自分のステータスチェックをせんとな」

祠に戻りながら僕はそう独りごちていた。



❀ 3 できること、できないこと ❀

「ステータス、スキルの確認をせんとダメじやな。あと持ち物は何があるんじやろか」
祠の中に戻つてまずは確認作業から。

「オープン」

声に出すと、システム画面のような半透明の青いパネルが目の前に現れる。
「まるでゲームじやな」

ステータスは天災級モンスター並みとか言つとつたし、これで高いんじやろうな。
H P^{ヒットボンド}、M P^{マジックボンド}、知力に素早さも、数値が全部1万超えどるしのう。

あとはスキルのほうかの。

【名前】アサオ・セイタロウ（朝尾晴太郎）	【種族】たぶん人族
【年齢】63	【年齢】63
【レベル】9	【レベル】9
【スキル】属性魔法 Lv.50 無属性魔法 Lv.100 時空間魔法 Lv.100 生活魔法 Lv.100	各種異常耐性 Lv.100 各種攻撃耐性 Lv.100 無詠唱 Lv.100

鑑定 Lv.80	解体 Lv.50	農業 Lv.73	料理 Lv.23	杖術 Lv.50
【特殊】朝尾茶園	【加護】主神イスリール（極大）	【称号】界渡り 人間離れ	【称号】主神の恩寵 <small>おんちう</small> （ばな）	

種族が「たぶん」ってなんじや？ たぶんって。

年齢は、おお、10歳も若返つとる。

レベルは……さつきレッドベア狩つたから上がつたのかのう。

スキルも言つたものは全部ついとるな。農業と料理は日本でやつてたから付いてるんじやろうか？

スキルはレベル10で一般的、30で職人、50でベテラン職人、80で超一流、100で最高じゃな。

〈朝尾茶園〉はお茶が買えると言つたのう。

ゲームだと加護は神様からの恩恵つて扱いだつたんじやが……

ん？ イスリールは主神じやつたのか。じやあ一番偉いんじやな。

その割には単純な間違いしどつたしのう。うつかり神なのかもしれんな。

称号は何の効果があるか分からんな。まあどれもなんで付いたかなんとなく分かるから大丈夫じゃろ。

さて魔法の確認じや。

『属性魔法』は風火地水に光闇の六種じやな。

どれも使えるのは初期の魔法だけじやが、さつきの威力を見たらそれで十分じやろ。

『無属性魔法』に回復、補助、支援が含まれておると。

この祠の結界のようになんじやろうな。レッドベアみたいな魔物がいるのに入ってこないのが、突破できないほどの防御力の証じや。

回復系に蘇生魔法まではないんじやな……それでも部位欠損まではなんとかなりそうじや。

補助、支援系はどうじや？

バフ、デバフ共にいいものが捕つておるのう。相手に使われたら嫌なモノばかりじやな。まあそういうモノで立ち回るのは面白いからね。楽しみじや。

『生活魔法』は便利そうじやな。照明、火付け、掃除、洗濯、乾燥などの細々としたことができるとは。

あと地味ながらも『無詠唱』のスキルがあるのはありがたいことじや。

魔法は格好いいんじやが、呪文を口に出すのは恥ずかしいからぬ。イスリール、ぐつじよぶじや。

魔法の名前も言わないので良さそんなんじやが、完全に無言つてのも味気ないしのう。なんの魔法を使うか言うくらいなら恥ずかしくないからいいじやろ。

これなら無理に戦わなくてもなんとかなりそうじや。

足止め、拘束して逃げてもいいし、状態異常に逃げるのもありじやな。それでも向かってくるなら攻撃すれば問題ないじやろ。

正当防衛じやよ、正当防衛。

さて残るは【無限収納】の中身の確認じやな。

ほう、ステータスと同じようにパネルで一覧表示されるのか。ソート機能まであるとは便利じや。

イスリール、ここもぐつじよぶじや。

食料、装備、テントなどの野営道具、調理用具一式、お金800万リル……は、はつびやくまん！?

イスリールさんや、多すぎんか？まあケチる神様よりかはいいんじやろうが、ずいぶん大きな額じやのう。ひと月いくらで生活できるか分からんにせよ、1リル1円としても

最初に持つ額じゃないかの？ その辺りは街に行つてから要確認じゃ。
それとも物価が高いのかの？ その辺りは街に行つてから要確認じゃな。

最後は装備じや。

と言いつつも【无限収納】から出したのは急須きゅうすとお茶。

生活魔法《淨水》ヨウスで水を出して急須に入れ、同じく生活魔法の《加熱》カーネートで急須ごと温める。

「一服してから装備品の確認じや」

ついでに茶請けの前餅せんべいを出して小腹を満たす。

「ふう。日本人は緑茶じやのう」

まつたり。
のんびり。

「さて装備じや、装備」

濃緑色のローブ、葉っぱが一枚付いている枝、茶色のエンジニアブーツ、ペンドント、指輪、黒色のとんがり帽子、カーキ色の肩下かばんげ鞄。

これで一式かの？ しかし枝？ 枝じやないのかの？

枝を手に《鑑定》カタサルと念じると、枝の鑑定結果が表示される。

それと同時に枝は杖に形を変えた。

【名前】世界樹の杖

【効果】破壊不可。魔法の威力が上がる。名前、ステータス、効果の全てを隠蔽。ただローブ、ブーツ、ペンドント、指輪、帽子、鞄も気になり鑑定すると、どれも破壊不可。

使用者固定で高品質の一級品。

もれなく隐蔽効果付き。鞄はアイテムボックスになつて

おつて、【無限収納】と同じくたくさん仕舞える上、この中では時間が経過しないという

優れものじや。

気前よすぎるじやろイスリール。
それって貴重なんじや……イスリールさんや、やりすぎじやないかの？

世界樹？

さあ、使用者固定で高品質の一級品。もれなく隠蔽効果付き。鞄はアイテムボックスになつておつて、【無限収納】があるのにアイテムボックス？と思つたが、そこは希少性の差を誤魔化す為じやな。

【無限収納】があるのにアイテムボックス？と思つたが、そこは希少性の差を誤魔化す

【無限収納】 持ちは数百万人に一人。対してアイテムボックスはかなり高価ながらそれなりに出回ってるらしいからなの。
貰えるもんは貰うし、使えるもんは使う。

これは街へ着いたら神殿で祈るべきじやな。

でもまず今声に出しておこう。

「イスリール、ありがとう。大切に使わせてもらうからの」

近接戦闘はしないほうがいいじやろな。ステータス的に問題なくてもしたくないわい。

「素直に足止め、拘束からの逃げを基本に『いのちだいじ』にじゃな」

さて方針も決めたことじやし、街に向かうとするかの。

地図は【無限収納】に入つてなかつたし、何かないものかのう。

そこで出しっぱなしだったステータス画面が目に留まる。その端にマップ機能のタブを見つけた。現在地と周囲の地図が表示され、拡大縮小も出来る便利仕様じやつた。

イスリール、またしてもぐつじよぶじや。

今いるのがこの森のこの祠で……ほほう、ここはジャミの森と言うんじやな。

一番近くの街だと……南東にあるスールの街かのう。距離は分からんが目見当だところじやな。

じゃな。

よし目的地も決まつたんじや。明日はスールの街に向かおう。
今夜はこの祠で過ごせば安全なはずじや。
ならあとすることは食事と睡眠じやな。
【無限収納】 からすぐつまめるものをみつくろう。
夜更けまでのんびりまつたり一服タイムは続くのじやつた。

『4 街へ行こう』

祠で一夜を明かして翌朝。

茶畠と家庭菜園の手入れを日課にしていたおかげか、朝も早くから目が覚めるんじやよ。
祠から表に出て大きく伸びを一つ。
夜露に濡れた森はしつとりしていた。日差しもしつかり届いているが、周囲には若干のじやつかん
朝もやが漂う。

その中で日課のラジオ体操第2をこなしていく。

ちゃんと覚えているでもなく、なんとなくあやふやな記憶の体操でも、毎朝の日課はこなさないと気分が優れないのじや。

「朝から森の中で体操とは気分がいいのう」
ひと通りの運動を済ませて朝食。【無限収納】からおにぎり、漬物、急須、お茶を出す。

「すぐに食べられるものが入つてるのは便利じゃな」

異世界に来てまだ二日目。【無限収納】からはお茶に煎餅、おにぎりに漬物まで出でくる始末。まだ不自由さは感じておらん。

「とりあえず南東のスールの街へ向かうかの」
【無限収納】に毛布や急須を仕舞い、身支度完了。

祠に忘れ物がないのを確認し、イスリールに礼を言つて出発。祠を一晩の宿代わりに間借りしたしのう。

森の中は木々が生い茂つておつた。

マップを確認しながらのんびり歩き、時たま出てくる魔物には足止めをかけつつ逃げる。足止めが効かなかつた魔物は慌てずに各種初級魔法で退治。

「ほぼ一撃で退治できるのはステータスのおかげなんじやろうな」

退治した魔物を【無限収納】に仕舞い、また歩き出す。

疲れたら周囲に《結界》を張り一服。トイレ、食事、睡眠時にも《結界》は大活躍じや。あとトイレは土属性初級魔法が《穴掘》だつたんで助かつとる。これは戦闘時の落とし穴にも使える優秀な魔法じや。

《穴掘》で作つた穴に用を足し、《清浄》で綺麗にして、穴を埋める。

《淨水》^(ウオータ)で尻を洗うのも試したが問題なくできた。

日の出に起きて歩き出し、夕方になると大きな樹の下や岩陰、洞穴に入つて《結界》を張り、その中で睡眠。

一日あたり数匹の魔物を狩り、歩き続けること五日目の昼前。
ようやく森を抜けて街道らしきものに出る。
そこから数時間歩くとスールの街が見えてきた。

「この五日間、風呂に入れなかつたのが地味ながら苦痛じやつた」

風呂の代わりに《清浄》を自分にかけて、絞つたタオルで身体で拭いていたので身綺麗。なんじやが、温水を浴びて湯船に浸かることができないのがこんなにもどかしいとはの。この辺りは日本人のままなんじやな。

スールの街は周囲を高い壁に囲まれた街じやつた。

入り口である門は開いていたが、傍らに門番二人が立つておつた。

「爺さん、観光かい？」身分証の提示をお願いしていいか？」

「田舎から物見遊山でいろいろ巡ろうと出てきたんじや。身分証がないんじやが、どうすればいいんじや？」

「身分証もない田舎からかい。そりやまた珍しいな。なら仮の身分証を作るから一緒に来

てくれるか?」

「お願いするのじゃ」

門番に連れられていった先は小さな小屋じやつた。

中に入ると、手のひら大のガラス玉のようなものを目の前に差し出される。

「これを持つてくれ」

言われた通り持つが何の変化も起こらない。

「犯罪歴はなしと」

ガラス玉に変化があると取り調べになるそうな。その時は、仮身分証も発行されずそのまま御用になる流れらしい。

一種の魔道具なんじやと。しかもガラスでなく水晶だそうじや。魔力を中央のネットワークに登録されて一括管理されてるらしく、大きな街だと五歳くらいの子供から登録するんだそうな。

「通行料と仮身分証の発行代で20000リルだ」

「じゃあこれでお願いするのじゃ」

肩から提げている鞄から銀貨一枚を出して払う。

「爺さん、仮身分証をなくさないでくれよ。再発行するにもまた金がかかるからな」

この世界のお金の単位は、十進法でケタが上がり、硬貨が変わる。

一番下が石貨の1リル。そこから鉄貨、銅貨、銀貨、金貨、大金貨、白金貨と上がっていく。一番上の白金貨一枚で100万リルなんじやと。そんな硬貨使う機会あるのかのう?

「正式な身分証はどこで発行できるのじゃ?」

「市民じゃないから、冒險者ギルドか商業ギルドに登録すればもらえるだろうな」

「そこに行って登録してみようかの」

「正式登録が済んだら仮身分証はここに返しに来てくれ」

「分かった。いろいろ助かったわい」

礼を言い小屋をあとにする。

ついでと言つてはなんだが、風呂のある宿屋を聞いたら、ないと言われた。

水桶で済ま

すのが普通らしい。《清浄》があるので風呂に入るには贅沢なんだそうじや。

とりあえずオススメの宿屋を聞いたのでそこに泊まろうかの。

その宿屋は大通りから一本路地を入った所にあった。

宿に入るとおばちゃんが出てくれた。儂よりかなり若そうじや。

「泊まりたいのじやが部屋は空いたるかのう?」

「一泊二食付きで50000リル。食事しななら40000リルだよ」

「なら食事付きで一週間お願いするのじや」

「はいよ。お爺さん、前金だけど大丈夫かい？」

「大丈夫じや。これで合つてるかの？」

お代を払い水桶を追加で頼む。水桶一杯で100リルじゃつた。

夕食までまだ時間があるらしいから、とりあえず身綺麗にして一服じや。

そのあと神殿と買い物じやな。

神殿に来ると、中には石像が数体立つていた。

正面の石像の顔立ちがどことなくイスリールに似てる気がするの。

その前に立ち、目を瞑る。すると周囲の音がだんだんと消えていく。不思議に思い目を開けると、そこはイスリールのいた部屋じゃつた。

「こんには、セイタロウさん。無事で何よりです」

イスリールは爽やかな笑顔を見せていた。

「イスリール、いろいろありがとうのう。いや、イスリール様かの？ 主神様じやし」

悪戯っぽくそう告げると苦笑された。

「今まで通りで構いませんよ。主神と告げなかつたのはわざとですから」

「しかしイスリールや、少しやり過ぎでないかの？ お金にしろ装備にしろ、十分過ぎる

【】

わい。ただでさえステータスやスキルでかなりの無理を言つたはずじやのに「

「いえいえ、それこそお詫びでしかないですから」

「ならいいんじやがのう。イスリールに迷惑かけてたらすまんからのう」

好き放題言い過ぎたと、ステータスの確認をした時に思つたのじやよ。

「セイタロウさんならステータスもスキルも、もちろん装備だつて悪用しないと思つてますから】

そんな笑顔で信頼の言葉をかけられたら裏切れんじやろ。

「まあのんびり過ごすだけじゃから大丈夫じやろて」

「はい、のんびりしてください。何か困りごとがあつたらまた神殿に来てください。できるだけ力になりますから。あ、困りごとなどなくとも祈つてもらつて平氣ですかね」

爽やか笑顔のイスリール。話し相手が欲しいじい様でもあるまいに。

「困りごとが起らないうように気を付けるのじや」

そう告げると周囲の音が戻つてきた。

また暇な時にでも来てやるかの。

神殿で用を済ませ、残るは買い物。欲しいモノは日用品、下着などの衣類。あとはすぐつまめる食料をいくらか。料理はできるが、自分の分だけじやと面倒じやからの。食材よ

り出来あい物じや。

ひと通りの買い物を終えて宿屋に戻る。

部屋で自分に《清淨》をかけていると、夕飯だと声をかけられた。

そこで分かったのじや。この世界がパン食文化だということが。

パン嫌いじやないが、パンだけとなると寂しいのう。

しかもどれ食べても塩味じや。肉も野菜もスープもどれもが塩味なんじや。

不味くはないんじや。

美味いんじや。美味いんじやが全部同じ味とはのう。

イスリールに貰つた調味料使つて自炊も考えないとダメじやなこれ。

その後は部屋へ戻り、調味料の種類、残量などを確認し、明日の予定を考えてからベッドに入った。

『 5 街中探索 』

一夜明けた今日はいろいろ買い物と市場調査じや。イスリールに貰つた金は、沢山あるとはいえ有限じやからな。冒險者になるか、売れるモノを扱うかして稼がねばならん。ただ、冒險者だと「じじいはひつこんでろ」ってテンプレがありそうな気がするんじやよ。

それなら商人になつたほうがいいのかもと思つての。売るモノの目星は付けとるんじや。お茶じや。

イスリールの話だと、お茶はあるが日本より美味しいらしいしの。じやから儂のスキル〈朝尾茶園〉で買つたお茶を売ろうかと思うてのう。

うちでは緑茶だけでなく紅茶も作つてたから。

ついでに売り物としてはコーヒー豆、海苔、白米もじやな。あと茶器もいくつかあつたからそれも売れるかもしれんしのう。相場が分からんからその辺りを調べんとどうしようもないのじや。全く売れないとか、安すぎるようならまた別を考えるだけじやな。

市場をぶらぶらしながらいろいろ見て回る。

食器、野菜、肉、ハーブ類、パン、保存食など必要と思われるものは買いじや。

【無限収納】があると腐る心配がないのはホントありがたいのう。

軽食を出す店があつたので一服。

コーヒー、紅茶はあつたが緑茶はなかつた。

それぞれ一杯でコーヒー2800リル、紅茶3500リルとかなり高めな値段設定。高い割にどちらも香り、味共に薄かつたわい。豆も茶葉もケチつとるんじやないか?

店員に聞いたら商業ギルドが一括管理していると教えてくれ、次の目的地が決定。

商業ギルドはスールの街の中心部にあつた。

原価率と一杯辺りの使用量をざっくりと多めに設定しても、それぞれ100グラム10万リルはかたいはずじゃ。足元見られたら売らなくとも構わん。

とりあえずはギルドへの登録からじやな。

商業ギルドは小さめな役場のような外観をしておつた。

……商工会議所みたいなもんかのう。

「ギルドに登録したいんじやが儂でもできるんかのう？」

中に入り受付に声をかけると、若い嬢ちゃんが答えてくれたわい。

「商業ギルドへようこそ。どなたでも登録は可能ですが、どのような商売をなさるかで登録料、説明などが変わります。どのような形態になりますか？」

「物見遊山しながらの移動販売じやな」

「移動販売でしたら年間登録料5万リルになります。こちらの水晶に手を当てて魔力を流していただけますか？」

受付カウンターの脇にある水晶に触れて軽く魔力を流すと、淡い光が放たれる。

それが收まると水晶から欠片が落ち、それがカードの形を成していく。

「ほほう、面白いのう」

「初めて見る方は大抵驚かれますよ」

「これも魔道具の一種なんじやろうか？」

「ええそうです。詳しいことは秘密ですが」

唇に人差し指を当てウインクする嬢ちゃん。

「茶目つけ氣があるのう。」

「説明の前にカードに血を一滴お願いします。それで所有者登録となりますので」

カードと針を渡されたので、言われた通り血を一滴垂らす。

カードが淡い光を放ち、それが收まると名前が記されていた。

【名 前】アサオ・セイタロウ

【形 態】移動販売

【ランク】F

「移動販売の方に限らず最初はランクFからになります。年間売上に基づいて税金が課せられるのですが、店舗を持たない方は一律年税5万リルとなっています。違法行為をして捕縛された場合はカードに記録されます。逮捕、訴追、受刑となりますとギルド員資格を

はく奪され、以後二度と登録できなくなります。これは全ギルド共通の規約です。なので受刑までいくようなことはしないでくださいね」

「分かったのじや。平和、平穏でいけばいいんじやな」

「ギルドに主となる販売品目を登録しておくと、他のギルド員や各地のギルドとの売買に便利です。アサオさんは何を販売されますか?」

「食料品になるのかのう」

「では登録しますね。この情報は犯罪記録などと一緒に一括管理されます。ここまで何か質問はありますか?」

「大丈夫じや」

「なら説明は以上です。商売頑張りましょうね」

「小さくガソツボーズの娘ちゃん。かわいいのう。」

「ああそうじや。ちと知りたいんじやが、茶葉はいくらぐらいするんじや? 店で飲んだ時に高いと思つたんじやが」

「品質にもよりますが1000ランカで15万リルくらいですね」

「高いのう。やはり贅沢品じやな」

「ふむ。イスリールから得た知識で単位の違いも苦労せんな。地球の1グラムがこつちだ

と1ランカじやな。

「はい、贅沢品です。ただ貴族の方々への販売が主ですので商いとしては何ら問題はありません」

「ほうほう。いろいろ助かったのじや」

「登録料と税金を一括で払ってギルドを出る。

ふむ。やはりかなりの儲けを見込めそうじやな。

明日辺り試飲用に小分けしたものを持ち込んでみようかの。それを試しに売つてから今後を決めても問題ないじやろ。

売るにしても店で一切見なかつたアルミ袋のままは無理じやろうから、何か容器を見つけないとなんのう。茶筒みたいなものがあると嬉しいんじやが。木筒、袋、蓋付き小鉢、陶器辺りが妥当じやな。見つけたらいろいろ買っておけばいいじやろ。

市場をぶらぶらしながら木筒などを探し、気になつた物を適当に買う。

木筒や麻袋などが無事に手に入つたのは幸いじやつたな。

傍から見れば観光に来たオノボリじい様の散財くらいにしか見えんじやろうな。

市場調査を兼ねた買い物もしたし、ギルドの登録もした。今日はもう宿屋に戻つてのんびりじや。

❀ 6 試飲からのひと悶着

翌日。

朝食後にギルドへ売る物の選別じや。

食後の衣服に緑茶を淹れ、〈朝尾茶園〉の画面を開く。

スキルの使い方も刷り込まれるとから迷わなくて良いのう。

まずは自分で飲む為の緑茶、ほうじ茶を各200グラム×一袋を購入。

茶園オリジナル紅茶100グラム×一〇一袋を購入。売り物一〇〇袋に試飲用一袋じや。

決して高級品ではないが、自家栽培茶葉を自家製造しとるから、少しだけ市販品より割高なんじや。

豆もこだわりの逸品じやから、ちょいお高めになつとる。対してインスタントコーヒーは市販品なもので、量販店より少し高いくらいじや。

焙煎コーヒー豆500グラム×二〇袋、インスタントコーヒー200グラム入×五〇袋も購入。

ティーカップセット、ティーポット、コーヒーカップを数セット。

コーヒーのドリップセットに、念の為のコーヒーミルも一台買つておくかの。もしかしたら碌なモノがないかもしれんの。

……おお、できる。こりやラクチンじや。

紅茶を蓋付きの木筒に移して一〇〇本完成。試飲用の分は間違えないように茶園の茶筒にしてと。

コーヒー豆は麻袋に入れ換えて、インスタントコーヒーは陶器にしとくかの。
 「これで準備万端じやろ」
 ……一服しながら一息つけば、ふと疑問が湧いてきたんじやが。

これだけ買うと茶園の在庫はどうなるんじやろ？ 每年かなりの量を作っていたが、品切れになつたりせんのかのう？
 今度イスリールに聞かんとダメじやな。
 商業ギルドに着いたのは昼過ぎ。昨日と同じ受付の嬢ちゃんがいた。
 「紅茶を売りたいんじやがどうすればいいかの？」
 「紅茶ですか？ 少々お待ちください」

声をかけると、嬢ちゃんは受付の裏へ姿を消し、少しすると初老の男性と一緒に戻ってきた。

「紅茶買付担当のビルと申します。いかほどの量を売つていただけるのでしょうか？」
下手に出つつも值踏みするかのようなくつしげな視線のままのビル。

「1万ランカあるんじやが」

「1万ランカもですか！」

こちらでは高級品な紅茶を、爺がいきなりこれだけ大量に持ち込めば驚くのも無理はないのかのう。驚くほどの量でもないと思うのは、日本を基準にしてるからじやろうな。

「別室でお話を伺いたいので、一緒に来てもらえますか？ その量の査定となりますと立会人も必要ですので」

「構わんぞい。大金が動くことになるじやろうからな」

ビルは先に話を通してくるとのことで、案内は嬢ちゃんがしてくれた。

「アサオさん、昨日茶葉の値段を聞いていたのはこの為だつたんですね」

「そうじや。いきなりその場で出して貰い叩かれても困るからなう」

「相場が分からなかつたから仕方ないですけど、それでも登録翌日に紅茶を1万ランカも持ち込むだなんて思いもしませんよ」

嬢ちゃんと会話しながら少し歩くと、ある部屋の前で止まる。

その部屋はギルドマスターの待つ応接室じやつた。

扉を開けると長髪の男性が両手を広げて待つていた。
「当商業ギルドマスターのネイサンです。紅茶を売つていただけるとか。まず品質の確認をしてもよろしいですかな？」

「初めて。昨日登録したてのアサオじや。茶葉の品質ならこれで確認を頼むかの」
鞄から茶筒を取り出してテーブルに置く。

見やすいように茶筒の蓋にいくらか出してネイサンに見せる。

「この容器も珍しいですね。いや、今はそれより品質確認です。失礼します」
手触り、香りを確認するネイサン。目つきが商人のモノに変わる。

「試飲するのが一番早かるう」

ティーポット、ティーセット、お湯も取り出し、紅茶を淹れて三人に差し出す。

「色、香りともに素晴らしい。今までのものとは別格だ」

「この器も綺麗です。こんな綺麗な白の器なんて初めて見ました」

「私は紅茶自体そんなに飲んだことありません。恥ずかしながら」

「思ひの感想を述べるネイサン、ビル、嬢ちゃん」

「好感触じやな。」

「で、いくらじや？」

あまり時間をかけても仕方ないので单刀直入じや。これで即答できなら他に行こう。

「100ランカ12万リルでいかがでしょう?」

「相場は100ランカ15万リルじやないのかの?」

「それは以前の相場です。今はもっと下がつてますのでこの値段になります」

「ふむ。帰るのじや」

全てを鞄に収納して席を立つ。

「ま、待ってください。安すぎでしたか」

「当たり前じや。自分たちの指、鼻、舌で最高品質と納得したんじやろ? それなのにそ

んな値段では、売る必要がないじやろう。他に行くだけじや」

日先の儲けに釣られて欲をかきすぎじや。

「僕としてはこのギルドに登録したから売ろうかと思つただけじや。別にここで売らねばならん理由は全くないからのう」

当面の資金もまだあるからこれは事実じや。侮られてまで売る必要は全くないんじやよ。

「分かりました。この品質のモノを仕入れない馬鹿はいません。100ランカ20万リルでいかがですか?」

「それは真っ当な相場じやな」

「ではそれで」

ネイサンが言い終わる前に言葉を付け足していく。

「ただ軽く馬鹿にされたからのう。誠意くらいは見せてほしいんじやよ。ダメかのう?」

目を見開き、思わずビルを見るネイサンじやが、彼は味方であつても若干立場が違う。良い品を仕入れることが一番大事な紅茶担当者。そんな者が目の前にある最高品質の仕入れの機会を逸するはずもない。力強く額がれると、ネイサンはこう言うしかなかつた。

「……100ランカ23万リルでお願いします」

苦虫を嚙み潰したかのような渋い表情で、声を絞り出してネイサンは小さく答える。

その値段で仕入れても全く問題ないくらいの利益は出るじやろ。

「それで手を打とうかの。ここに全部出せばいいのかの?」

「ビル、量つてください。私はアサオさんとまだ商談がありますので」

木筒100本を鞄から出してテーブルに並べる。

ビルは部屋から一度出て、量りを持ってまた戻ってきた。僕から見える所で計量をする

「ようじやな。

「で、商談の残りとは何じや?」

「この茶葉の仕入れはどちらからなんで」

「教えるわけないじやろ」

立ち読みサンプル はここまで